

話題の現場トリビアI

新しい国立競技場の気(木)になるはなし

取材・文・撮影／独立行政法人農林漁業信用基金

東京オリンピックのメインスタジアムとなる新しい国立競技場は昨年11月に竣工されました。美しい木の軒庇に彩られたこの「杜のスタジアム」には、全国47都道府県の国産材が使用されています。実際に目の前にすると、壮大さを感じるとともに、木による温かみや清涼さを感じました。今回の「話題の現場トリビア」では、国産材という視点から、関係機関のHP、公開情報等により、国立競技場についてリサーチしてみましたので、ご紹介します。



**「すべての日本人の心を一つに」
とのコンセプトで、軒庇には、
全国から調達した国産材を使用!**

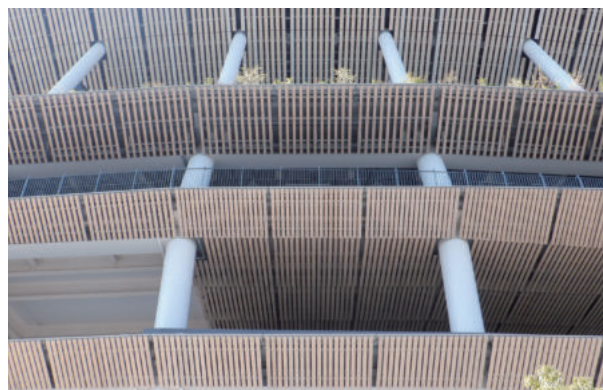
国立競技場の軒庇には、47都道府県すべてから集めたスギ(沖縄はリュウキュウマツ)を使用しています。また、エントランスゲートの軒にも、東日本大震災で被災した岩手県、宮城県、福島県のスギと熊本地震で被災した熊本県のスギが使用されています。

すべて森林認証材を使用!

軒庇の使用材は、47都道府県から集められているだけでなく、すべてが、「持続的な管理が行われている」として認証を受けた森林認証材

です。

もともとは、47都道府県のうち5分の1程度は認証林がなく、申請を考えていなかったところもありました。しかし、林野庁、地方自治体、都道府県の森林組合連合会、関係者が連携・協力して、すべての都道府県からの認証材調達を実現させたのです。



木の美観にもハードルが!

軒やエントランスゲートに使用された木材は、美観が優れていることも求められました。しかし、限られた認証林の木の中で、それに合致する高品質な木がどの程度採れるのかを予め見通すのは困難でした。

また、美観要件をクリアするものとは具体的にどういうものか、製材業者は示されたサンプルをもとに、苦心惨憺したそうです。

木材使用量は、 一般住宅用の板1万6千枚相当!

軒庇及びエントランスゲート軒に使用された木材は合計で145㎡です。これは、一般的な住宅で多く用いられる板(間柱:幅10.5cm×厚さ

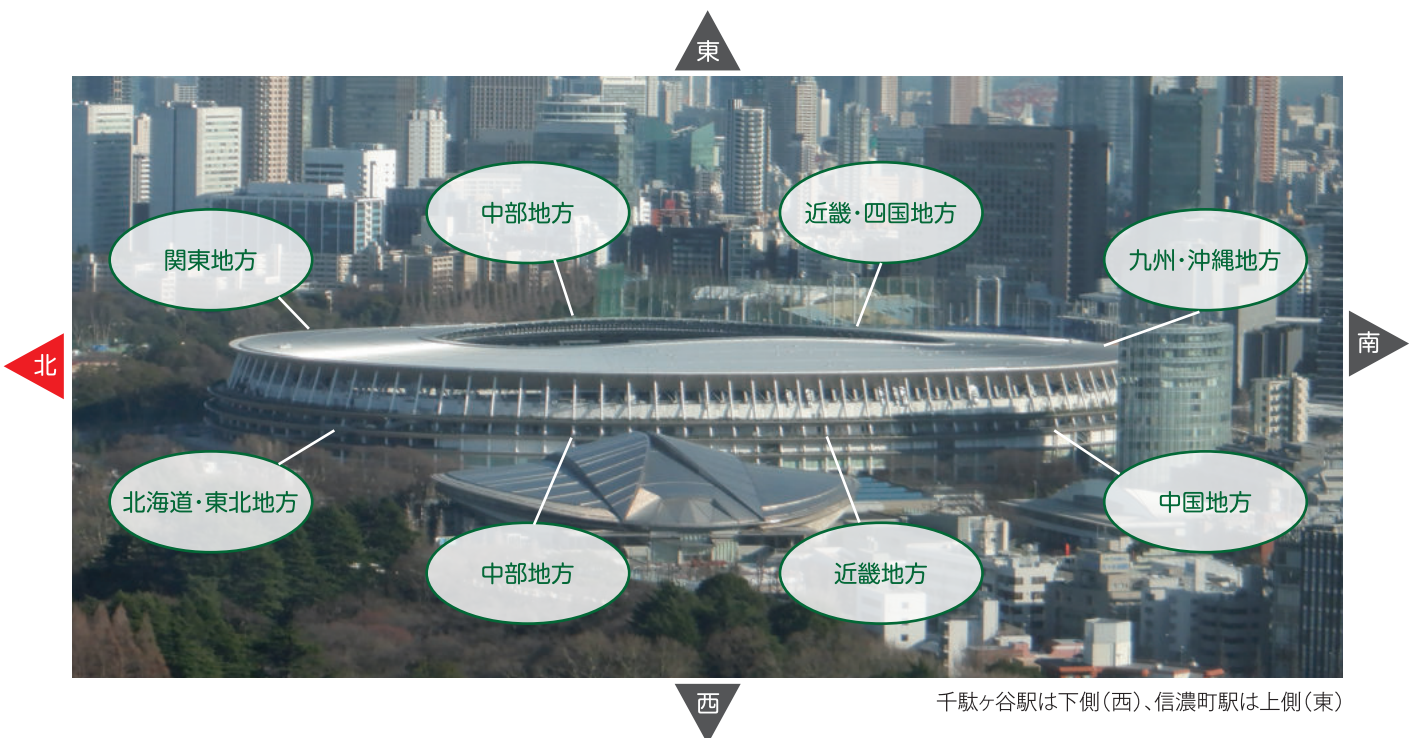
3cm×長さ3m)に置き換えると、約1万6000枚に相当します!

最終的に軒庇になった材の量は145㎡ですが、そこに至るまでの歩留まりを考慮すると、製材過程でおよそ10倍の材、原料の丸太まで遡ればその100倍を超える量が必要だったと考えられます。

こうしたことから、あの軒庇は、製材業者、流通業者、そして森林管理者(生産者)までの一連のステージにおけるすべての関係者の努力の結晶だと言えますね。

あなたの地方の木はこのあたり!

スタジアムをぐると囲む軒庇に使われている材は、方位にあわせて、概ね下図のように配置されています。



いかがですか。国立競技場を木の視点から見ると、違った楽しみ方ができるかもしれません。この秀麗な「杜のスタジアム」には、全国の森林・林業・木材産業関係者の皆さんの苦勞が詰まっています。国立競技場を訪れる機会がありましたら、ぜひ、関係者の御尽力に思いを馳せていただきたいと思います。